

災害に備え、防災意識を高めよう！

8月に南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）が発表されましたが、地震だけでなく、台風などによる、大雨・洪水災害などの自然災害はいつでも起こるかわかりません。

災害に備え、今一度各自治体から配布されている「防災ハザードマップ」などを確認し、防災意識を高めていきましょう。



自分の住んでいる場所が川の氾濫、土砂災害危険箇所に含まれていないか？どこに避難すればいいのか？事前に確認、頭に入れておくことで、いざという時に迷いなく避難できるようにすることが大切です。

防災マップには、災害に備えるための情報がいろいろと記載されています。確認しながら、いつでも持ち出せるように非常食など常備しておくこともお勧めします。

また、高齢者や体の不自由な方がいらっしゃるご家庭などは災害時、地域の人達の協力・支援が必要になります。日頃から声を掛け合うなど、ご近所同士の交流をもち、いざというとき互いに助け合える関係を作っておくことが大切です。



<非常持ち出し品> (一例)

■食品・水

飲料水、レトルト食品(ごはん・おかゆなど)、缶詰、インスタントラーメンなど

■救急・安全関係

救急医薬品(絆創膏、消毒液、包帯など)、薬(常備薬、持病の薬、処方箋の控えなど)、ヘルメット

■貴重品

現金、預金通帳、印鑑、クレジットカード、免許証など

■日用品

筆記用具、懐中電灯、携帯ラジオ、乾電池、ローソク、マッチ・ライター、ティッシュペーパー、缶切りなど

■衣類

下着、靴下、上着、タオル、毛布、手袋、軍手など

■その他

洗面用具、携帯トイレ、雨具、生理用品など

※リュックサックなどにまとめておくと、避難時に両手の自由が利くので安全です。

NPO 法人クローバー・サービス

京都府船井郡京丹波町橋爪楡山 53

■TEL (0771)88-5014 / ■FAX (0771)88-5017

■e-mail: info@cloverservice.or.jp

■ホームページ http://www.cloverservice.or.jp

クローバー・デイサービスセンター

京都府船井郡京丹波町橋爪楡山 41-1

■TEL & FAX (0771)88-0138

■e-mail: day@cloverservice.or.jp



facebook QR



有田誠(ありたまこと) 京丹波町在住の映画愛好家。
写真は、大阪府茨木市福井 (筆者撮影)

大阪の特産品アヘン

JR茨木駅から北に国道一七一号線を越える。その辺りが旧三島郡福井村、現在は市街地化している。ここに二反長音蔵^{にたんちょうおとせう}という農民がいた。



二反長音蔵(1875~1950)

である。

日本のアヘン政策は、英国より大規模にもかかわらず、学校では教えない。岸信介や大平正芳など首相経験者が関わったこと。三菱商事、三井物産がペルシャ(イラン)から密輸したこと。三共や武田など製薬会社がアヘンを精製してモルヒネ、ヘロインを生産していたこと。権力や資本に

日清戦争後の台湾支配から敗戦に至る五十年、日本はアヘンを重要な財源に戦時体制を継続した。

不都合なことは子供には教えない。台湾総督府はアヘンの専売制を実施した。原料はペルシャ、トルコ、インドなどから輸入した。二十歳になつたばかりの音蔵は、自給すれば国家財政が助かると、関係機関に何度も建白書を出した。

そのアヘン生産を支えたのが音蔵

これを総督府民政長官の後藤新平が採り上げた。後藤は台湾の中毒者の吸引量を漸減し止めさせるため、必要なアヘンを入手しようとした。音蔵は、三島郡から京都の桂村までのケシ栽培指揮監督の嘱託を受ける。アヘン精製は、星一^{はじあ}の星製薬がやった。息子の星新一は『人民は弱し官吏は強し』(新潮文庫)に事情をくわしく書いている。

第一次世界大戦の始まり



当時のアヘン専売所の看板

とともに、軍需用のモルヒネの需要が高まる。世界中で原料アヘンが不足した。担当の内務省はケシ栽培の普及を急いだ。三十年代後半になつていた音蔵の技術が再び買われた。

一九二一年、大阪府のケシ耕作面積は、二位和歌山の七倍あった。その後、和歌山が一位となる。国際法上違法のケシ栽培を外国の眼から隠すためである。東海道沿線は目立ち過ぎた。

一九二二年、音蔵は地場産業育成の功労者として、大阪府知事から表彰された。

一九三〇年代に入る。満

州事変から日中戦争の時期、日本は戦費調達のため、栽培を朝鮮、熱河省、蒙古へと拡げる。

白頭山の国境周辺で朝鮮人たちに栽培、生産を強制した。ただ、後にこれは抗日ゲリラ対策のため熱河省に限定した。

これらの土地での指導のため、音蔵は数十名の軍隊に守られ、老齢にもかかわらず、何度も出向いた。

この倒錯した音蔵や国家の精神構造は、今に至るまでニッポンの不変の病である。大陸で大量の中毒者や死者が出るといふ他者への想像力が決定的に欠けている。

熱河省は現在の内モンゴルの一部に当たる。日中戦争を始めると、内モンゴル、華北を合わせた地域を日本



ミヤコ蝶々(1920~2000)

軍は占領、傀儡の蒙古連合自治政府を樹立した。ここで大量のアヘン生産が始まった。戦争の八年間、百万の軍隊をアヘンで支えたのが日中戦争である。

ケシについて

ケシの開花が終わるとケシ坊主ができる。それに傷をつけ樹液を採る。これを乾燥させたものが生阿片で、さらに乾燥させた阿片煙膏を吸引する。

生阿片を工業的に加工してモルヒネをつくる。鎮痛剤と麻薬の両方に使う。モルヒネの化学処理からヘロインができる。これは全くの麻薬。

厚生労働省資料によると、

満州事変(一九三一年)からの三年間、日本のヘロイン生産量は、世界総生産量の半分以上である。

ヒロポンと女子学生

JR茨木駅近くの府立春日丘高校は、かつて茨木高等女学校だった。ここでは、覚醒剤入りの菊の御紋つきチョコレートを女学生が包装していた。これらは特攻隊員に与えられた。

ヒロポンは一九四一年、

大日本製薬が売り出した覚醒剤メタンフェタミンの商品名である。武田薬品のアソフエタミン商品名ゼゾリンもある。注射すると疲労がボンと取れる大阪系の命名、ゴキブリがホイホイと同次元です。

三人の発言

ミヤコ蝶々(毎日新聞一九八五年六月二日)

「軍隊ではヒロポンを特攻隊の人に打っていました。戦争が終わったら要らんようになって、広告出して(薬局で)売られたんです。軍隊というか国の都合が先で、国民はええように振り回されてました。太宰治さんや織田作之助さんがヒロポン中毒になりはった。漫才のミス・ワカナさんも亡くなった。私もガタガタです」

西村晃(井筒和幸監督への言)

「私は予科練上がりの特攻隊だろう。あのボン打って出てっただのはほんとだよ。あと操縦桿と股の間に日本酒の小瓶もしまつて出ていったんだ。ニュース映画

で見ると別れの盃を一杯なんて広報用の演出だよ」

藤原道子議員(一九五一年二月十五日参議院厚生委員会)

「このヒロポンは戦争中に軍需工場等で使われた。あるいは特攻隊にも使われた。予備隊の常備薬にもこれは入っておる」

(注)予備隊とは警察予備隊、現自衛隊のこと。朝鮮戦争中、米軍は手薄になる日本国内の「治安」のため、米軍補佐部隊として、急速設立させた。現自衛隊法十五条の三第一項に「自衛隊は麻薬、覚醒剤原料を所持できる」とある。ヒロポンやゼゾリンは現在も製造されている。

特攻隊生みの親、大西瀧治郎(現丹波市青垣町出身)は、敗戦時切腹したが、児玉誉志男に保有のヒロポンを託し、それは保守政治家の資金になったらしい。

軍神磯川質男

JR茨木駅前の商店街に今は看板だけが残る「宝寿

司・宝食堂」があった。この質男(十九歳)は、最初の特攻隊員として、ミンダナオ島ダバオから出撃した。音信が途絶え、上層部は戦死と判断する。

二階級特進、軍神として報道され、地元は大騒ぎになる。弔問客は絶えず、見舞品、弔問金が集まった。「軍神磯川質男一等兵曹の家」と貼紙がされ、英雄になっってしまう。

ところが不時着して生きていたのである。上層部は責任逃れのため、あくまで死んだことにした。以降の経過は省くが、質男は七か月後、鹿児島県鹿屋上空で撃墜された。二十歳になったばかりであった。

なぜか、彼の名前が沖繩県糸満の「平和の礎」に刻まれている。

押し花のコースター作り (デイサービス)

8月20日(火) 押し花ボランティア「花かご」から5名を招き、コースター作りをしてもらいました。ボランティアの方からアドバイスを受けながら、レース紙の上に色とりどりにレイアウト世界にたった一つしかない花のコースターが完成しました。



↑ 出来上がったコースター

↑ ピンセットを使い、花を配置する利用者さん

〈賛助会員〉

(有)あさひ堂
 (株)一谷住宅
 イン・ザ・ルーム亀岡店
 上段税理士事務所
 (株)高木設備
 たにやま鍼灸整骨院
 田端輪業
 (有)土佐寿司
 (有)永田損害保険事務所
 (有)西村テレビ
 ノエビア京都西都販売会社
 三木歯科医院
 みづほ電工
 理容ちどり (五十音順)

編集後記

全国のスーパーで米が消えています。「令和の米騒動」ともいわれるこの現象、南海トラフ地震の注意情報が出た影響で、米を必要以上に購入して備蓄する人が急増。さらにそれを知った人たちが慌てて購入に走り、品薄状態になってきているようです。▼コロナ禍では、マスクの品薄、トイレトペーパーや、ティッシュの品薄なども起こりましたが、「無くなるかも?」「この先高騰するかも?」と必要以上に購入し、それをニュース等で報道されることで、今回のような現象がよく起こります。▼もうすぐ収穫期をむかえ、新米も出回るこの時期に必要な以上に買い占めている人たちを見ると、そんなに慌てなくても…とは思いますが、1970年代のオイルショックを体験した世代の方だけでなく、次の世代も同じような行動を起こしている、人間って変わらないものだな。とつくづく思います

▼「令和の米騒動」は昨年、別のところでも話題になっていました。中日ドラゴンズの細川成也選手が夏場に入り調子が落ちてきてそれを懸念した立浪監督は「ご飯の食べ過ぎで動きが鈍くなっただからだ」と考え、改善策として「ご飯の提供をやめさせようです。そうしたことでもまた成績が上がってきた」とから、他の選手も炊飯器を撤去し、白米の提供を禁止したそうです。結局、他の選手からも「この時代になり米が食べられないと思わなかった。もはや令和の米騒動」と不平不満が高まり、結果、敵地十三連敗につながり、選手たちも元気がなかったそうです。▼「腹がへっては戦はできぬ」とは、まさにこのこと。戦国武将、北条氏綱が息子の氏康に送った書状の一部にも書かれています。古来より米を主食にしてきた日本人の遺伝子が引き継がれているのでしょね。へ編集子